AACK 京都大学学士山岳会 No.102

Newsletter

September 2022

http://www.aack.info

目　次

カンペンチン峰初登頂 40 周年特集

カンペンチン初登頂 40 周年
上尾庄一郎.....1

カンペンチン登山と学術
西山　孝.....4

登頂しなかった言い訳
斎藤清明.....6

カンペンチン登山から始まった私の学術研究—高所医学
松林公蔵.....8

カンペンチン 40 周年
森戸隆男.....13

先輩　舟橋明賢氏を想う（2021 年 12 月 29 日逝去）
芳賀孝郎.....15

第 54 回雲南懇話会（京都フォーラム）講演概要（その 2）
山岸久雄.....15

会員動向.....18

事務局だより.....18

編集後記.....18

カンペンチン峰初登頂 40 周年特集

今年は 1982 年のカンペンチン峰（7281m）初登頂から 40 年になります。5 月 28 日に行われた AACK 総会では、AACK 創立 90 周年記念行事の一環として、「カンペンチン峰初登頂と学術研究の発展」と題した講演会を実施しました。隊員 4 氏による講演会の資料は AACK ウェブサイトでご覧いただけます。

これを機に、Newsletter でもカンペンチン峰初登頂 40 周年特集を組むことにしました。隊員であった幸島司郎会長から呼び掛けていただき、隊員の皆さんから原稿が寄せられましたが、力作ぞろいのため、紙面の都合で、この 102 号と次の 103 号に分けて掲載することにしました。

102 号では 5 編を掲載します。103 号では 4 編の予定ですので、どうぞお楽しみに。

編集人　横山宏太郎

カンペンチン初登頂 40 周年

上尾庄一郎

2022 年 5 月 28 日　京大楽友会館で開催された AACK2022 年度総会において、［**カンペンチン峰初登頂と学術研究の発展**］をテーマに約 1 時間の講演会が開催された。隊の副隊長で、近藤良夫隊長の高山病発症による急な帰国により、実質上は隊長職を務めた上尾庄一郎にはカンペンチン初登頂に関する約 15 分の講演が依頼された。

この遠征隊の公式報告書は『カンペンチン』（昭和 58 年 7 月 5 日　毎日新聞社発行　定価 6700 円）として発行されており、また AACK 創立 50 年記念に刊行された『ヒマラヤへの道』（今西錦司編　昭和 63 年 5 月 20 日　中央公論社発行）の本文の執筆者は隊員の斎藤清明氏なの

でこの遠征隊については詳しく記述されている。

今では講演はPowerPointを使うのが常識なのは知っていたが今まで触ったこともなく、先ずはその習得から始めた。幸いにも隊員幸島司郎氏から提供された電子化された写真や私が公式報告書を撮影した図像は容易にPowerPointに取り込めたが、現在のカンペンチン近傍の状況を知るためのGoogle Map, Google Earth画像を取り込むのは私には難しく、小学6年と高校1年の孫の助けが必要であった。

講演に用いた画像は、他の講演者の画像と共に、京都大学学士山岳会ホームページ、www.aack.infoを開き、News & Eventsの2022年度総会の報告の中の、講演会資料を開くとGang Ben Chen（7281m）カンペンチンの項目が出るのでその中の、1　講演資料1（pdf）を開くと見られる。

この時の講演を基にAACK Newsletterに投稿するよう横山宏太郎編集人から依頼があり、不得手ながら以下に記述する。

この遠征隊成立の経緯については公式報告書に西山　孝氏が詳しく記述しているが、元々は会創設50年記念事業として、初めてチベット高原の未踏峰登頂を目指す遠征隊が計画され、しかも対象をグルラマンダータ峰としていたが実現の見込みは立たなかった。

一方、AACK会員で神戸大学教授の平井一正氏は神戸大学のチベット遠征を実現するためあらゆる機会を使って北京の中国登山協会（CMA）を訪ねてコネクション作りに努め、副主席の史　占春氏とは中国語で親しく会話出来るほどだった。1981年4月北京滞在中の平井氏からAACKが希望するならCMAはネパールとの国境線上の未踏峰ランタン・リ登山を許可する可能性が高いと連絡があり、平井氏が北京滞在中に返答するようとのことであった。

京都では急遽協議の結果、AACKは中国側からのランタン・リ登山申請を行うこと、協議のために斎藤惇生、西山　孝を北京に派遣することを平井氏に連絡した。その後、突然ネパール国からランタン・リ登山許可が来たりして一波乱があったが、最終的に蘭塔山（ランタン・リの中国名）学術登山隊が動き出し、1981年秋には偵察隊が派遣された。

偵察隊長は日本山岳会の遠征隊員として2度のチベット経験があり、ネパール側からのランタン・リの偵察、試登を行ってきた横山宏太郎氏であと若手の牛田一成氏と中川　潔氏が参加した。この隊はランタン・リがネパール側から初登頂されてしまった場合に備え、近くにある未踏峰のカンペンチンの偵察も行うことになっていた。カンペンチンは平井氏が神戸大学のために1983年以後の登山許可を取得していたので、予め同氏から1982年の登山許可申請への了解を得ていた。

偵察隊が活動中にランタン・リがネパール側から初登頂された情報が京都に伝わると斎藤惇生氏と上尾が北京のCMAに行き1982年カンペンチン登山許可取得の交渉にあたった。CMAの担当者は交渉の席から神戸大学平井教授室に直接電話をかけ、平井氏が了解していることを確認して許可証を発行した。この様にカンペンチン登山隊の成立には平井一正氏の影響が大きいことを強調しておきたい。

斯くして成立した隊の正式名称は［**1982年チベット高原学術登山隊**］で隊の構成は以下の通りである。

隊長	近藤良夫（57歳）
副隊長	上尾庄一郎（44歳）
秘書長	西山　孝（43歳）
通訳	陳　介臣（39歳）
報道記者	斎藤清明（36歳）
登攀隊長	森本陸世（33歳）
隊員医師	松林公蔵（31歳）
隊員	牛田一成（27歳）
隊員	幸島司郎（26歳）
隊員	人見五郎（26歳）
隊員	森戸隆男（25歳）
隊員	中川　潔（24歳）
隊員	近藤裕史（24歳）
中国側	
連絡管	張　俊岩（53歳）
コック	タットー（47歳）
高所協力員	4名

日本側隊員の中で7000m以上での登攀経験があるのは、サルトロカンリ（1962年）、ガネッシュ（1964年）の上尾とヤルンカン（1973年）の森本登攀隊長だけで、特に森本は8000m以上で活躍した経験を持つ。

40年前のカンペンチン峰初登頂の話の前

に現在のカンペンチン峰周辺の状況を見てみたい。これには自宅から自由に使えるGoogle Map、Google Earthを利用すると便利である。

これらを見ると蘭州、西寧からチベット高原を縦断してラサまで鉄道が通じ、さらにシガツェまで延長されているのが良くわかる。

以前、私は笹谷哲也氏に引率され開通直後で満員の列車で西寧からラサまで旅行したが、この路線は途中には6000mの高地を通る。この建設は大変な困難を伴い多くの作業員の犠牲者が出たとされているが、当然だと思える。車内では6000m地点でも乗客は普通に動き回っており、また高度計はその高度を示していたので、私は車内を加圧するのではなく酸素濃度を高めて高山病対策をしているのだと思った。

ラサからシガツェまではヤルツァンポ川沿いに鉄道と並行して以前にはなかった国道が建設されている。40年前の国道は5000m近い高度を通る悪路で、近藤良夫隊長の高山病発症を招いたのだった。

シガツェからネパール国境までの国道は改良され舗装されているのが分かる。またエベレスト（チョモランマ）ベースキャンプまでの道路も舗装され、点在するホテルも見える。

シガツェから先への鉄道は今のところ建設が始まった様子は見えないが、国境まではラサからシガツェまでの二倍ほどの距離で技術的な困難は予想されないのでいずれ建設されると思われ、その場合も国道と並行して敷設されるであろう。その時には列車の窓越しに南方向にエベレストを中心にヒマラヤのジャイアントが繋がって並ぶ風景、西方向にはシシャパンマとカンペンチン峰の雄姿を、高山病の心配なく、誰でも堪能出来るであろう。今のところはあまり知られていないカンペンチン峰も、鉄道の開設によりチベットを代表する有名な山に昇進することが期待される。政治状況次第でこの鉄道は国境を越えてカトマンズまで延長される可能性がある。

Google Earthを拡大してカンペンチン峰をみると、BCやABCの場所がよく見える。

40年前には京都出発時点で登路を検討する唯一の資料は観測衛星ランドサットの撮影画像の黒白プリントアウト写真であった。衛星が地球を常時撮影している膨大な画像からピンポイントで場所、時期、天候を特定して必要な画像を入手（東京で出来た）するには高度な知識が必要で、職場（気象協会）で業務上利用していた森本登攀隊長だから出来た功績である。

本隊が北京に到着したとき、驚いたことに、CMAからカンペンチン峰周辺の五万分の一の地図を見せてもらった。これは未公開で軍用の極秘資料と思われたが、我々は在北京の日本企業の事務所でゼロックスコピーを作成し密かに携帯し登攀ルート選定に利用した。講演で使った画像の中に隊員が地図に見入る様子の画像がある。

過去40年間の中国の社会インフラや人々の生活様式、生活水準の変貌は驚異的で同じ国とは思えないほどである。遠征隊は空路北京、成都を経由してラサに入ったが、両市にも高層ビルはまだ無く、人々は男女とも人民服姿で大挙して自転車で移動していた。交渉のために北京に行った帰りの飛行機は上海空港を経由したが、当時の上海空港は正に田舎の空港で滑走路の横に立つ木造の小屋が乗客用の待合室であった。現在の上海浦東空港は世界最大級の巨大空港で、上海市中心部までリニア鉄道が通じており短時間で移動できる。

当時ラサ滞在中の外国人は皆郊外の設備の整ったバンガロー式の外国人招待所に宿泊し、市内へはCMAのバスで移動した。

ラサでは陸路別送され、既に到着していた隊荷のチェック、ジョカン寺、ポタラ宮などの観光の後、カンペンチン峰目指して出発した。次の宿泊場所のシガツェまでは前述したように高所を通る悪路であった。シガツェの宿舎で隊長が発病し、急遽松林公蔵医師と陳介臣通訳が付き添い比較的設備の整った人民病院で診察を受け直ちに入院し、治療の結果自立出来るまでに回復すれば早急に帰国する事となり、以後隊は計画通り行動し、上尾が隊長代行を務める事となった。

シガツェから先のネパールへ向かう公道を西進し最後の宿泊所である辺境の町シガールまでも悪路であるが、その先で公道と別れてからは更に険悪となった。予想より積雪量が多くランドサット画像、地図（コピー）、偵察隊の写真を参照しながらベースキャンプ予定地に辿り着くのは容易ではなく、氷結した川の岸で前進出来なくなり、ここをベースキャンプとした。高度は4650mで、登路に予定している前山までは随分距離がある。

チベットでの登山とネパール、カラコルムでの登山の大きな違いは、チベットではベースキャンプまで自動車（ジープ、トラック）が利用出来ることと荷揚げにヤクが使える事である。我々も4人の高所協力員の助けを借り、5200mの中継キャンプを経て5700mの池の畔の平地にABC（前進ベースキャンプ）を作り、この地点までヤクとヤク使いにより大量（約1トン）の荷揚げをした。

ABCから約1時間登るとコルに達し、向こう側のなだらかなザレ場をトラバースして容易に氷河上に立てた。氷河は荒れていず左岸沿いにルートをとり、フィックスロープを張って登路を確保し6200m地点にＣⅠを立てた。この先のアイスフォール帯を抜けると上部大雪原の下部に出られるはずで、慎重に偵察を重ねアイスフォールを突破し、予想通り大雪原に達し、更に平坦な雪面を登って6700m地点にＣⅡを建設した。ＣⅡまでの荷揚げには隊員と共に馬力のある4人の高所協力員が活躍した。偵察のためＣⅡから大雪原を頂上を目指して登り、頂上直下で急傾斜の雪壁の下にあるクレバス前の高度7100m地点まで達し、クレバスを越えて雪壁に取り付けることを確認して登頂体制に入った。

この時点で上尾はＣⅡから若手隊員8名で一挙に登頂する事を提案し、森本登攀隊長の同意を得た。成功すれば隊員の満足度が上がり、人材育成に資するばかりでなく、中国方式の多人数での初登頂はCMAに対してAACKの能力をアピールでき、次に計画しているグルラマンダータ登山許可取得に役立つと考えたからである。

初日の登頂活動は頂上直下の雪壁の上までフィックスロープを張ったところで悪天候のため中止され、隊員全員がクレバス横に4人用テントを張って待機したが天候の好転は期待出来ないので、ここで4人用テントに8人入ってビバークすることにした。

翌日は好天でロープを頼りに雪壁を登り、全員が集合したのち登攀隊長を先頭に年齢の順にすぐ先の頂上に立った。頂上からはネパール、チベット高原が360度見渡せた。

更に翌日は上尾と西山秘書長が森本、牛田のサポートを受けて登頂した。当時、上尾44歳、西山43歳の記録は日本人のヒマラヤ初登頂の最高齢とその次とされた。

登山活動終了の後、ベースキャンプを基地に各種の学術調査をおこなった。

隊がチベットを後にして成都に帰着して出迎えの近藤良夫隊長と再会し、全員揃って北京に到着した。CMAは我々の成功を喜び特別に人民大会堂での宴会をセットしてくれた。

なおグルラマンダータ（中国名　ナムナニ）登山計画は紆余曲折の後、AACK、同志社大学山岳会とCMAの三団体合同登山隊として成立し、1985年に初登頂した。8名の初登頂者には松林公蔵氏が含まれる。

一方、平井一正氏は熱心にCMAとのコンタクトを継続し、遂に神戸大学のため1986年の名峰クーラカンリ登山と東チベットでの学術調査の許可を取得し、同大学隊の総隊長として初登頂に成功した。この成功の報道に接し、私はカンペンチンの借りから解放されたと思った。

この40年間に近藤良夫隊長、森本登攀隊長と近藤裕史氏、人見五郎氏が死去された。ご冥福をお祈り申し上げる。

カンペンチン登山と学術

西山　孝

本年がカンペンチン登頂40周年に当たるということで、少し当時を振り返ってみたいと思います。AACKは、創立50周年事業としてチベット高原に学術登山隊を派遣することを決定しました。当初はランタン・リを候補とし偵察隊を派遣し準備をすすめましたが、ネパール側から先に登頂されてしまいました。そこで、紆余曲折のすえ登攀対象を未踏峰のカンペンチン峰に変更し、初登頂と学術調査ならびに後継者の育成を創立50周年事業とすることになりました。1981年のことです。このニュースレターにもひんぱんにでてきますが、AACK創設50年余りの間に登山史に残る、輝かしいヒマラヤ初登頂がいくつも成功しました。しかし、これらはすべてヒマラヤ山脈南面からのもので、北面、チベット高原からの登山は戦前か

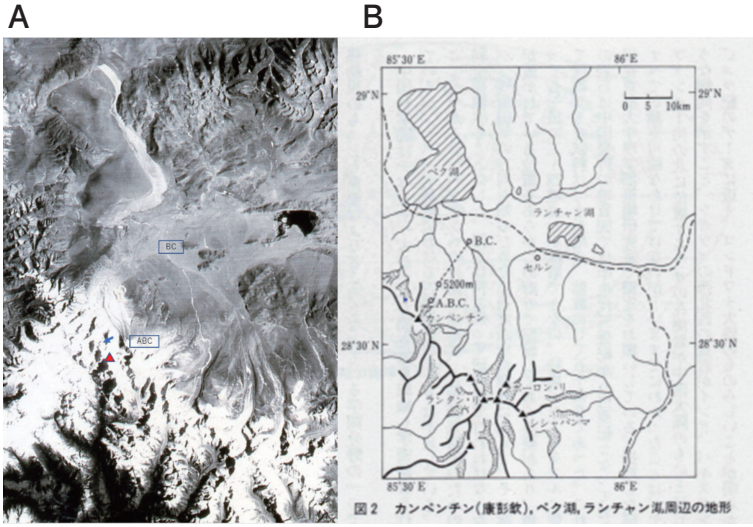

Fig.1　カンペンチン、ペグ湖、ランチャン湖　A：ランドサット画像（1977）
B：地形図

ら計画があったもののまだ実現していませんでした。カンペンチンがチベット高原からのはじめての登山でした。また、AACK の遠征隊では、濃淡はありますがつねに登山だけでなく学術調査がおこなわれてきてきました。カンペンチンでも、フィールドワークの対象として不足のないチベット高原をまえにして、研究経験のあさい隊員が多くをしめてはいましたが、精いっぱい、広範な調査がおこなわれました。このときのテーマがきっかけにライフワークにつながっていった隊員もいます。また、カンペンチン遠征後に、ブータン、シシャパンマ、ナムナニ・・・と AACK あるいは AACK が深くかかわる学術登山隊がつぎつぎに派遣されています。AACK50 周年事業としてはその役目をはたした隊だったと思っています。

学術面では、まず登攀中は健康管理をかねた心電図やむくみの診断などの高所医学、また気象観測と FAX で送られてきた天気図は登攀と学術の双方で重要なものでした。また、登攀活動がスムーズにすすんだことで、ベース・キャンプの撤収までに一週間の科学調査に専念できる余裕ができました。隊員それぞれに登頂成功と無事帰還のよろこびをかみしめながら、ポーロン高原にみられる生物や家畜、湖水、岩石などの調査をおこなっています。この学術登山をとおして私の印象に残っておりますのは、ランドサット画像の解析とランチャン湖の調査です。

今日ではグーグルアースをダウンロードすると、地球のすみずみまで拡大したり縮小したりしながら画像を楽しむことができますが、40 年前は、ランドサットの 1/100 万の白黒画像がめずらしかった時代でした。最初に、ランドサットの画像が役に立ったのは登攀ルートの検討会でした。登攀ルートとしてカンペンチン下部の尾根をつたって雪原にでるルートがもっとも適切と判断されていましたが、手元の写真では尾根が途中で切れ、写っていないところがありました。そこが雪で埋まっておれば簡単に通過でき雪原にでられますが、岩壁ならば大きく迂回するルートが必要になります。縮尺の小さいランドサットの写真をルーペで拡大観察しますと、欠けている部分は白く写っておりました。そこで、ここが登攀ルートの第一候補に決まりました。

また、この画像は 1977 年 3 月に撮られたも

Fig.2　ランチャン湖の調査

Fig.3　A：テチス海の化石　B：古地磁気測定のための試料採取

のでしたが、西に大きなペク湖があり完全に氷結しています。ところが、東の小さなランチャン湖では氷は溶けて北西部にわずかに残っているにすぎません。これは帰国後の湖水の化学分析結果から塩分濃度の差に起因すると解析されました。このランチャン湖についてはボートをだして集中的に調査されましたが、まずおどろいたことは水深がどこも浅く 2m 以下で、湖底には小さな魚（裂腹魚）が住んでいました。

私の学術調査項目は地質と地球化学をあげておりましたが、種々の研究分野があり、もちろん一人で全体をカバーできるようなものではありません。しかし、分野によっては、喉から手が出るほどほしい試料が散らばっているフィールドです。そこで、できる限り広範囲に湖水や岩石を収集、もち帰って専門とされる研究者にゆだねることにしました。ランチャン湖周辺でみつかった二枚貝（モノティスの仲間？）と巻貝の化石、古地磁気を測定するための岩石試料、安定同位体と塩類分析のための湖水や河川水などです。さらにチベットのような低温乾燥地帯では、不安定ですがめずらしい鉱物がしばしば産出することが知られています。南極では同じような気候のところで新鉱物が発見されています。そこで石の裏についている蒸発岩などをかき集めもち帰り X 回折分析で調べましたが、残念ながら新鉱物につながるような、珍しい鉱物は見つかりませんでした。なお、これら試料にもとづく研究成果は、陸水、古地磁気、安定同位体などそれぞれの分野で報告されています。

また、研究の終わった岩石試料 30 点余りは京都大学総合博物館に収蔵されています。ついでに記しますと、斎藤 Y さんから寄贈されたチョモランマ三国隊の登頂者山本宗彦氏が 1988 年に採取した頂上の石灰岩も一緒に収蔵されています。

登頂しなかった言い訳

斎藤清明

40 年も昔のことなので、「カンペンチン初登頂」という副題を付けた自著『チベット旅情』（芙蓉書房　1983）を、懐かしく取り出した。「あとがき」を登頂 1 周年記念の集いの日に記してあり、隊の報告書である AACK 編『カンペンチン』（毎日新聞社 1983）と同時期の出版。私にとっては初めての著作だった。

ラマ僧に扮して日中戦争末期にチベット入りした西川一三（1918 − 2008）の『秘境西域八年の潜行』（1967）を刊行した書肆からの執筆依頼だったので、意外におもったものだ。あのような破天荒な体験記とはくらべようがないものの、カンペンチンの頃はチベットに関する本には、まあ需要があったのだろう。でも、拙著はまったく売れなかった。今西錦司先生にお願いして、本の帯に次のような推薦文をいただいたのだが。

「秘境チベットの高峰カンペンチンの初登頂、凍原をさすらう遊牧民の生活やラマ教旧派の大本山サキャ寺の現状を確認した報告など。新聞記者らしい嗅覚と行動力が随所にうかがえる。第一線からの貴重な探検記録として必読の書」

今にしておもえば、あのころは日中国交正常化（1972 年）から華やかにうたわれていた「日

写真１　斎藤著『チベット旅情』。帯に今西さんの推薦文

1982年(昭和57年) 4月26日 (月曜日)

カンペンチン峰 初登頂

21、22日に京大学士山岳会

中友好」の時代だった。1989 年のラサ暴動や天安門事件までは、「改革・開放」がもてはやされていた。翻って、今日の日中関係や、強権的な大国になろうとは、おもいもよらないこと。

当時、私は毎日新聞京都支局で大学を担当していた。1981 年春からは医師国家試験の流出疑惑（4 月）や曼殊院の文化財調査（5 月）、科学者京都会議（6 月）、スマトラ・シンガポール取材（8 月）、湯川秀樹博士死去（9 月）、福井謙一教授ノーベル賞受賞（10 月）、今西錦司・ハイエク対談（同）、アジア分子生物学機構シンポ（12 月）と、けっこう忙しかった。カンペンチン隊の 12 名の隊員は既に 11 月には決定しており、私は年末になって追加された。会社には夏ごろから隊への後援依頼をしていたものの、ほとんど諦めていたので、支局長から派遣させてやると言われ、飛び上がるほどうれしかった。

もっとも、支局長には次のように要請していた。そもそも日本隊初の 8000m 峰登頂のマナスル隊は毎日新聞社あげての事業で、その始まりは京大の計画だった。西堀栄三郎さんのインド・ネパールへの費用も本社が出し、京大から日本山岳会への移譲の際もスポンサー付きだった。その後 AACK の遠征隊はチョゴリザはじめ、たいてい朝日新聞後援なので、今度こそ本社が後援すべきだと。

そんな昔話に、西田尚支局長はなんと、郡場寛先生（AACK 初代会長）をよく知っているよと返してきた。郡場家の近所で育ち、先生の東北なまりは聞きづらかったけど、郡場家の子どもたちとは仲良しで、家でよく遊ばせてもらったそうだ。戦時中にシンガポールへ司政官兼植物園長として出かける先生の軍服姿も思い出す、と。

写真２　『毎日新聞』（大阪）1982 年 4 月 26 日朝刊一面の記事

郡場先生は私が学んだ農学部農林生物学科の創設にも関わり、弟子で学科の初代教授の木原均先生は AACK 会長を長くつとめている。どうやら、西田支局長は因縁めいたものを感じたのではないだろうか。そうして、本社に働きかけ、私を行かせてくれたにちがいない。

ただ、毎日新聞後援といっても記者の派遣だけで、資金的な貢献はほとんどなかった。テレビを噛せることはできなかったからだ。それで、次のナムナニでは、私は毎日放送を引っ張り出すことに尽力した。

さて、私はカンペンチンの 7000 メートル付近まで登らせてもらった。隊員 8 名が初登頂した翌日、上尾副隊長、西山秘書長、森本登攀隊長らと第二キャンプを出発。上尾さんの「行けるところまで登りましょう。天候と体調をみながら」に励まされ、はじめは先頭を切って登っ

ていた。やがて、しんどくなり、緩斜面になったところで座り込んで休んでしまった。

濃紺の空をボンヤリと眺め、足元の雪面からはるか下を見ると、茶色っぽい大地が広がっている。まさに、チベット高原だ。この大地はラサにつづいている。そうして、北京にもと、おもったりしているうちに、「そうだ、初登頂の記事を送らねば」。

ここまで登ってきて、登山者になったつもりでいたようだが、私の仕事は記事を書くこと。今から下れば、今日中にA・B・Cに着く。そして、ベース・キャンプに戻って、郵便局まで行って電報で記事を送ろう。

雪面の上のほうを見ると、上尾さんがピッケルを振って、登って来いと言っているようだ。がんばって登っていけば、登頂できるかもしれない。でも、私は報道隊員だ。降りよう。

その日はA・B・Cに泊まり、翌日は雪の融けた平原をひとりで歩き通し、ベース・キャンプに着いた。その夜、書き上げた登頂原稿を、陳さんに中国語に翻訳してもらうと、700華字になった。翌朝、ジープで郵便局のあるシガールまで走った。昼休みで休憩中の無線技師に頼みこんで、毎日新聞北京支局宛てに打電してもらう。華字（漢字）を一字ごと数字に変換してのトンツーだから、時間がかかる。やっと、日没寸前に、キャンプに戻れた。

その翌々日の朝刊一面に「カンペンチン峰初登頂」が載ったことを、半月後に隊とともに北京に戻ってから知ることになる。「記者は七千メートルまで同行し、登頂成功を確認した」と記してあった。

カンペンチン登山から始まった私の学術研究―高所医学

松林公蔵

はじめに

1980年頃、各方面から、1982年を期してAACKがヒマラヤに登山隊を派遣するから、参加希望者は身辺を整えよ、という通達が聞こえてきた。当時、私は奈良県の天理よろづ相談所病院というところに勤務していたが、病院の制度として、若手医師に「登山」の名目で3ヶ月の休暇を与えることは不可能であった。ヒマラヤ登山に参加する希望をもっていた私は、1981年4月鹿児島の民間病院に転職して体勢を整えていた。後日聞いたことだが、京大の関連病院として有名な天理よろづ相談所病院から、若い医師が鹿児島の小さな民間病院に移ってくるのは不可思議で、天理病院で何か不祥事でも起こしたのではないか、という噂があったそうである。私は院長に、鹿児島の病院には1982年2月末までの1年間しか勤務出来ない、しかし、この1年間は、昼夜を問わず精励勤務すると申し出て、その通り励行した。当時、この病院の内科には、70歳代の年老いた二人の常勤医が勤務していたのみだったので、実質、この1年間は私一人で約100床の病棟を診ていたことになる。しかし、この1年間の鹿児島勤務で、鹿児島大学勤務の若手医師との交流ができ、今でも人的宝になっている。一方で、京都での準備作業には、定例のチベット委員会に出席する程度で、あまり貢献できなかった。

カンペンチン初登頂と隊長の病気

1982年3月14日、私たちは大阪空港から北京へ発った。北京、成都、ラサを経て、3月22日シガツェに入った。その頃から、近藤隊長が体調をくずされた。全身倦怠感、荒い呼吸、意識の混濁があり、急性高山病が疑われた。3月23日シガツェ人民病院で胸部レントゲンを撮影の結果、肺炎と肺水腫の所見を認めた。医師の私と通訳の陳介臣さんが付き添って、直ちに入院をさせてもらい、持続的酸素吸入を受けるとともに、抗生剤およびステロイドの投与を行った。上尾副隊長の指示は、ある程度回復した時点で隊長にはラサを経て帰国していただき、療養に努めるということであった。シガツェ人民病院入院後、ほぼ4日間で隊長は独歩可能となった。通訳の陳さんと私がラサまで付き添い、中国登山協会の職員が責任をもって、成都―北京を経て日本に帰っていただくとの確証を得て、隊長を見送ったのち、陳さんと私は、ベースキャンプで本隊と合流した。今回の隊長の高山病を解釈すると、出発前の隊長の激務が感冒を呼び、この際の気管支炎が十分に根治されて

おらず、この潜在的な気管支炎が肺のキャパシティーを落としているために低酸素に順化しえず、肺水腫を結果したものと考えられた。

カンペンチン遠征隊としては、登攀隊員全員の初登頂を果たし、成功裏に終了した。この機会を通じて、本来神経内科医で、中島ダンナさんのような呼吸器専門家ではない私が、高所順化と高山病の研究に本格的に取り組む契機となった。

高所順化と高山病

高山病の症状は、人によっては2500mあたりから現れる。標高が高い場所に入るとすぐ、というわけではく、数時間から数日程度の時間を置いて症状が出始める。富士山などでは多くの人が体験するが、初期のものは急性高山病と呼ばれ、頭痛、食欲不振、倦怠感、吐き気といった症状が現れる。対処としては酸素補給や口をすぼめてゆっくり息を吐く呼吸法なども効果的であるが、不調を感じたら高度を下げることが第一である。そのまま無理して登り続けるとやがて「肺水腫」を発症することがある。これは肺胞に水が溜まった状態で、そのまま登り続けると危険である。また肺水腫と併発することが多いが、脳が腫れる「脳浮腫」は放っておくと命に関わる。下山すれば症状は改善することが多いが、自力で歩けない場合は、誰かが担ぐなどして、とにかく高度を下げる必要がある。

高山病のときは、体内では主に2つの変化が起きている。1つには自律神経の失調。自律神経とは、心臓や胃腸を動かすなど、自分の意思でコントロールできない内臓の働きを調整している。自律神経には、興奮時に作動する交感神経系とリラックス時に作動する副交感神経系があり、普段は、両者の間でバランスが保たれているが、低酸素下ではそれが崩れ、倦怠感や吐き気などの不調を来すようになる。

2つめは細胞内に含まれる水分が細胞外に移動してしまうことである。低酸素下では多かれ少なかれ誰でも体がむくむが、それが進行すると肺水腫や脳浮腫に至る。また頭痛の症状は、脳に供給する酸素を増やそうとして血管が開き、周辺部位が圧迫されることで頭痛が起こる。

高山病は、呼吸が浅くなる睡眠時に症状が進行しやすい。起きているときは、意識的に呼吸を早めることも出来るが、睡眠時の呼吸は自分の意思では調節できない。高山病の症状で眠れない場合は、少量の睡眠薬を飲んででも睡眠を確保したほうがいい、という意見もあるが、睡眠薬を飲むと呼吸が抑制されるので、医学的には飲まない方がよいという見方が主流であろう。

エベレスト初登頂の課題

1921年にイギリスが国を挙げてエベレスト登頂を目指して以来、ジョージ・マロリーをはじめ、多くの登山家がこの山に挑み、1953年にはヒラリー卿とテンジンによって初登頂された。「エベレスト頂上に酸素の補給無しで人類が到達できるのか否か」という問題は、戦前から繰り返し議論されてきたが、1964年にPughという生理学者が米国生理学会の学術誌で、「酸素の補給無しでエベレスト頂上に達することは不可能である」と結論した。ところが1978年に、ラインホルト・メスナーとピーター・ハーベラーが無酸素登頂を成し遂げてしまったのである。現在では多数の人がエベレストへの無酸素登頂に成功している。生理学的にはエヴェレストの山頂くらいがちょうど人間が無酸素で到達できる限界と考えられているが、人間には生理学ではまだ明らかにされていない能力があるのかもしれない。

1924年にエベレスト頂上に向かったまま帰らなかったマロリーの遺体が、1999年にエベレスト直下で発見された。その後、マロリーは、登頂前に遭難したのか、あるいは登頂後に遭難したのか、という議論は今でも存在する。万一、マロリーが登頂後に遭難したのであれば、エベレスト初登頂は、1953年から1924年に改定されるのであるが、色々な状況証拠から、やはり登頂前の遭難である、というのが現在の定説であろう。

マロリーの挑戦は、エベレストという世界最高未踏峰登山の技術的な問題であるのと同時に、当時まだ知見が乏しかった高所順化の問題であっただろう。

京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊（写真1）

多くの登山家の経験とその文献的考察から、高所順化の問題が議論されてきた。AACKは、長らく初登頂主義を掲げてきたが、同時にパイオニアワークも重視してきた。会員の中島道郎医師と齋藤惇生医師は、1981年に「日本登山

写真１　京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊計画書

医学研究会」を立ち上げ、日本の登山家と登山を愛好する医師が、登山に関する医学的観点からの議論を行う場を創成した。そのような学問環境の中で、ヒマラヤ８千メートルに登る過程で、人体にいかなる生理学的変化が起こるのかを研究する医学学術登山隊をつくる計画が生まれた。当初は、全日本で行うのも意義があるとの意見もあったが、医師も多く在籍していて、登山文化も共有できる AACK を主体として計画をつくるのが妥当という結論になり、AACK の計画として理事会に諮った。医学計画としては、８千メートル峰であること、技術的に比較的やさしい対象であることを理由として、シシャパンマ峰（8027m）を選択した。AACK は、伝統的に未踏峰主義を掲げているので、既踏峰であるシシャパンマ峰に、AACK として遠征隊を派遣することには反対する会員も少なくなかった。

既踏峰ではあるが、“医学学術”というパイオニアワークを実現する遠征隊であるとのことで、最終的に AACK 理事会・総会の承認を得ることができた。当時の中心メンバーは、京大霊長研・助教授：松沢哲郎（登攀隊長）、高知医大老年病科・助手：松林公蔵（学術隊長）、島根医大小児科・助手：瀬戸嗣郎、京大心臓血管外科・助手：平田和男、京大農学部・講師：河合明宣であった。総隊長には、当時の京大病院長：戸部隆吉教授に就任をお願いした。顧問として、AACK 会員である林一彦先生、中島

写真２　新聞に掲載された隊員一覧

道郎先生、齋藤惇生先生、堀了平・京大病院薬剤部教授にご協力をいただいた。

シシャパンマ医学学術登山隊（1990）

シシャパンマ医学学術登山隊で得られた成果は、以下のようなものである。

①合計 22 名が 8000m 峰の登頂に成功した。総隊長や報道隊員を含めて現地に参加した日本人隊員 32 人のうち 15 人が登頂し、そのほかに中国人３人、ネパール人４人である。４名のネパール人シェルパのうちの３名は２度登頂したので、登頂者の延べ人数は 25 名になる。なお、日本人登頂 15 名のうち、６名が医師だった（写真 2）。

②日本人（白沢あずみ）と中国人（トンロ）の女性隊員が、第１次登頂者として、同時に登頂に成功した。トンロの場合、中国人女性としては２人目、漢族の女性としては最初の 8000m 峰の登頂者である（写真 3）。

③熟年の副総隊長２名（齋藤惇生 60 歳と中島道郎 59 歳）が登頂に成功した。きわめて異例なことであり、高齢者の 8000m 峰登頂記録としては、西独の 62 歳の男性がマナスル（8163m）に登頂した記録に次ぐものである（写真 4）。

写真３　第一次登頂隊員として頂上に達した日中の女性隊員（白沢あずみとトンロ）

④ニホンザル２頭（ムギとキュータ）が、5640m の高度まで到達し、ヒトと同じ条件のもとで比較生理学的な知見をもたらした。超高所・極低酸素における適応の生理的機構を実験動物学的視点から検討するパイオニア・ワークとなった。ヒト以外のサルとしての最高到達高度記録である。

⑤日本人隊員のうち 15 人が医師であり、検査技師などパラ・メディカルな職にある研究者４人、医療人類学といった分野からのサポートをする社会学的な研究者４人、さらに中国人特別隊員のリ・スーピン医師を含めると、総勢 24 人の研究者からなる低酸素症の機構解明のための総合医学学術調査が展開された。血液の分析による免疫系の変化（写真 5）、酸素摂取率の測定（写真 6）、心臓超音波断層装置をつかった心臓･循環器系の生理学的検査（写真 7）、眼底像の激変（写真 8）、胃粘膜病変の多発（写真 9）など、興味深い知見が得られた。

写真５　BC での血液解析

⑥最終キャンプ 7700m で、パルスオキシメーターによるヘモグロビンの酸素飽和度の測定をはじめ、呼吸や心拍などの生理学的データを終夜連続記録した。こうした超高所での終夜記録は最新知見であった。

⑦定期的に収集した大量の血液サンプルを液体窒素により凍結保存して日本に持ち帰り、その分析をおこなった。血液学的な研究としては、過去に類のない大規模なものである。

⑧ヒマラヤの北側（チベット）と南側（ネパール）で、高所住民の疫学調査・社会学的調査を

写真４　熟年で登頂を果たした齋藤惇生博士と中島道郎博士

写真６　トレッドミルを使用した最大酸素摂取率の測定

写真７　眼底検査

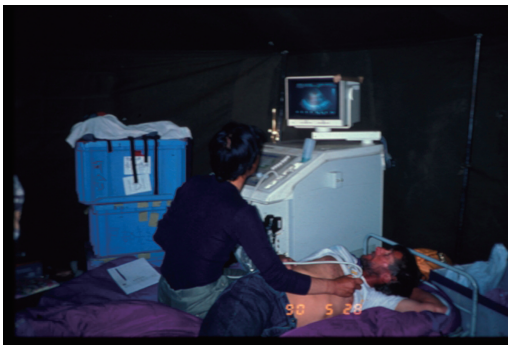

写真８　超音波ドップラーによる心臓機能測定

実施した。チベット系高所住民の医療人類学的観点からの広域・長期研究の一環として、ヒマラヤの南北で初めて調査した。北のティンリーで 115 名、南のナムチェで 49 名の貴重な血液標本を得たのをはじめ、心電図、呼吸検査、神経行動学的機能を明らかにし、同時に施療奉仕を行った。

本学術調査は、登山に関する顕著な業績をあげたとして、第 28 回（平成 3 年度）秩父宮記念学術賞を授与された（写真 10）。

シシャパンマ学術調査で得られたデータは膨大なものになるので、隊員各自が所属学会英文誌に発表するだけでなく、その知見を発表する媒体として、「ヒマラヤ学誌」を創刊した（写真 11）。「ヒマラヤ学誌」は、多少の空白はあったものの、その後フィールドサイエンスの学術誌として機能し、2022 年現在、22 号が編集中である。

「高所順化」研究から「高所適応」研究へ

登山では、高所順化の期間は短くて数日、長くても数週間ほどで完結する。それに対して、ヒマラヤやアンデスなどの高地で何世代にもわたって暮らす人々は「高所適応」といって、登山とは違う次元で高所に適応している。その代

写真９　隊員全員が上部消化管内視鏡検査を受ける

写真 10　秩父宮記念学術賞の贈呈記念写真（中央が秩父宮妃）

表的な例に、出産がある。仮に、平地で生まれ育った女性が標高 4 千メートルの高所環境で妊娠したとしても、おそらく妊娠を維持できない。低酸素下では母体の胎盤に十分な血流や酸素が供給されず、胎児が発育してゆくことができないからと思われる。高地住民は何世代にもわたる適応を遂げ、酸素の少ない環境下でも安定して命を繋ぐことができている。世界の 3 大高地として、チベット・ヒマラヤ、アンデス高地、エチオピア高地に人類が長い時間をかけて住み続けている。私のフィールド研究の関心は、「高所順化」問題から、人類の「高所適応」に推移し、チベット、アンデス、エチオピア高地在住高齢者の医学的研究を行った。

人類は、約 700 万年前に、チンパンジーの祖先と分岐して「ヒト」となった。我々ホモ・サピエンスは約 20 万年前にアフリカ大陸で誕

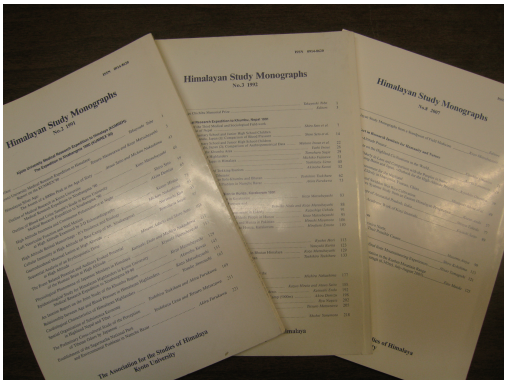

写真11「ヒマラヤ学誌（Himalayan Study Monograph）の刊行

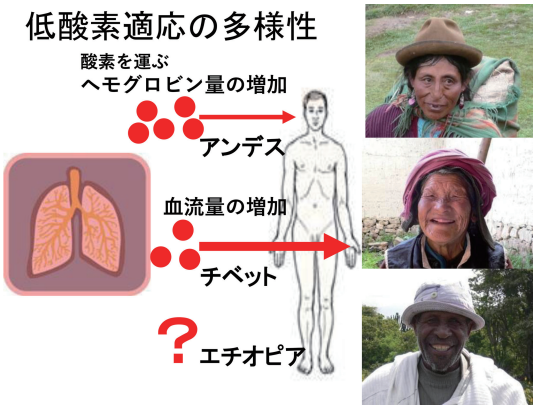

図1　世界の3大高地住民の低酸素適応の多様性

生し、地球上の各地へ拡散していった。人類で一番初めに高所に適応したのは約10万年前、アフリカのエチオピア高地に住み始めた人々であろう。長距離走に強い選手が多い理由のひとつもここにあるのかもしれない。エチオピアの次に適応の歴史が長いのは5～6万年前くらい前にアジアのヒマラヤにたどり着いた、今で言うチベット族をはじめとする人々である。そして、南米、アンデス高地には約1万年前に人類が移住を始めた。これらの時間差は、低酸素への生理的な適応方法の違いとなって現れているようである。

私たちの研究では、アンデスの人たちは、私たち平地人と同様に血中の酸素を運ぶヘモグロビンを増やすという形で低酸素に適応した。一方でチベット・ヒマラヤの高所住民はヘモグロビンを増やすのではなく、全身の血管を広げて血流を増やすことで適応していったと考えられる。人類で一番最初に高所に適応したにエチオピア高地の人たちは、調査したところヘモグロビンも多くなく、血流も多くない。彼らがどのようにして高所に適応できたのか、いまだ謎につつまれている（図1）。

さいごに

私は1982年のカンペンチン登頂後、1985年にナムナニ峰（7694m）、マサコン峰（7200m）の初登頂者となる幸運に恵まれた。1986年から、高知医大老年病科への赴任を命じられ、在任中の1990年にはシシャパンマ医学調査を仲間とともに実施できた。これらの契機を経て、高知医大の一介の講師の頃、1991年に学生を勧誘して創始した「フィールド医学」は、高知医大では、文化系学生クラブの一つであったが、2000年からは、京都大学医学部の一つの講座に昇格した。「フィールド医学」研究は、地域在住高齢者の健康問題を、疾病だけでなく、生活習慣、生活環境、文化、価値観などの視点からも捉え、従来の公衆衛生学の領域を超えて、さまざまな事実を明らかにすることができた。医学部卒業以来、一人の神経内科医として病院で働いていた私が、「病院医学」と併行して「フィールド医学」研究の重要性を認識できたのは、カンペンチン峰登山隊の隊員として、チベットに行かせてもらったことが最も大きな契機であった。

故近藤良夫隊長、上尾庄一郎副隊長、西山孝秘書長、隊員各位、また同時に当時のAACK諸兄に深謝いたします。

カンペンチン40周年

森戸隆男

カンペンチン遠征当時25歳だった。40年も前のことである。思い出せることも断片的でかなりあやふやなことばかりですが、機会を与えられてしまったので書き記すことにします。間違いがあったらゴメンナサイ。

学部卒業後AACKに入会したての春、1年先輩のベンタさん（太田）からインドヒマラヤへ行ってみないかという誘いに乗ってAACKのルームに行った。その場にイジラさん(牛田)、ダニさん（幸島)、コタレ（中川）クリマン（近藤）らがいたように記憶するが定かではない。勉強会をするということで資料を広げて見ているところに西山さんがルームに来られ、方々に電話連絡を始められた。「ランタンリの許可が中国側から出そうや。今晩チベット委員会を開くから君らも参加するように」と言われた。これがカンペンチンの遠征に参加することになったきっかけであったように記憶している。ランタンリがカンペンチンになった経緯はカンペンチンの遠征報告に詳しく書かれているが、私はただただ傍観しているしかなかった。

準備段階では総務係という役柄を頂き、西山さんの指示に従って募金などのお手伝いをした。左右田さんや木村さんのカバン持ちで京都、大阪の企業に募金のお願いに回った。相手の場所や連絡先を調べ、アポを取り、趣意書に宛名を書き入れ、お願いの金額を書き入れ、ハンコを押し、それをもってお願いに行くのだが気前よく出してくれるところもあれば渋いことを言われることもたびたびあったように記憶する。とはいえ近藤先生の絶大な力のおかげで順調に募金が進み、資金面で苦労することはほとんどなかった。

食料や装備の調達もスムーズに行われた。テントはその当時軽いドーム型のテントが出回り始めており、遠征隊でも使用されていた。我々も高所用に使用しようと考え、あるメーカーで試作してもらった。試作が完成した11月にテストを兼ねて立山に登った。メンバーは誰であったか記憶にない。1日目一ノ越でテントを張り、中でお茶を飲むためお湯を沸かしている最中だったか突然グラスファイバーのポールが折れてしまった。山行はあきらめて最終のバスに間に合うように室堂に下った。その日は確かに風が強かったのだが、この程度の風でポールが折れるようでは使い物にならないというのが僕たちの結論だった。結局このテントはベースキャンプで使用されたのみで上部のキャンプには使用されなかった。最近はほとんどがこの手のテントで随分軽量化されている。冬でも外張りを変えるだけで使用できるようになっているが、冬山で樹林帯を越える場所では使用したことはない。未だに信用できないのである。

カンペンチンの遠征そのものは近藤隊長が往路で体調を崩されシガツェから帰国されたこと以外は順調そのものだった。記録に書かれていないことで思い出すのは西山さんがC1（6200m）に上がって来られた時、岩石採集するから手伝ってくれと頼まれたことだ。周りを見渡しても雪と氷の世界で岩が出ているところはほとんどない。岩の出ているところに辿りつき適当な大きさの石を取って「西山さんこれどうですか？」と聞くと「それはアカンわ。腐っとる。」というご返事。試料採取の方は西山さんに任せて、採取された石をザックに詰めた。テントに戻るころにはザックもほぼ一杯になりかなり重かった。あの時のサンプルで何が分かったのか思い出す度に気になる。

カンペンチンの後、仕事で北京を訪問する機会があった。梅里雪山の遭難の後のことである。北京の変貌ぶりに驚いた。カンペンチンの時は北京飯店は北京の街中でひと際目を引く建物であったが、その時は新しい高層ビルに埋もれているように見えた。車も増え、もはや自転車はほとんど見られなくなっていた。仕事の合い間を見つけて故宮や天安門を見て回ったけれどカンペンチンは遠くになってしまったと感じた。

今でも出張中に大きな山を見かけたりすると、ついつい無駄に写真を撮ったり、ルートを目で追ってみたり、グーグルマップを拡げて位置を確認したりする。今更そんなところを登る力はないのだと自覚しつつ、そんなことをするのは山屋の性なのだろうか。

先輩　舟橋明賢氏を想う（2021 年 12 月 29 日逝去）

芳賀孝郎

2021 年 12 月、舟橋先輩が 98 歳で亡くなられた知らせを受けた。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

私が最初に舟橋先輩にお会いしたのは 1953 年ポストモンスーンのアンナプルナ遠征から帰られた翌年の報告会の時であった。

アンナプルナⅣ峰登頂目前でアタックテントがジェットストリームの大吹雪に遭遇し、テントは亀裂破壊されたことや、登頂隊員の今西壽雄、藤平正夫の両隊員は舟橋先輩の救助・撤退作戦により見事帰還した話を聞き、感激したことを思い出す。

私は現役時代、鹿島鑓で亡くなった鈴木廸明、鈴木弘二らと共に先輩の新婚時代のお宅を訪ねたことがある。戦後の学習院山岳部のこと、「厳冬期の尾瀬から奥日光縦断」を指導し成功させたこと、ヒマラヤ・アンナプルナの話等を聞き、酒を飲み、唄を歌い泊まり込んでご迷惑を掛けたことがあった。

鹿島鑓天狗尾根の遭難の時は、先頭に立って捜索活動を指揮してもらった事は忘れることが出来ない。

先輩は京都大学学士山岳会ではアンナプルナの活躍で高く評価されていた。カンチェンジュンガ連峰の未踏峰・ヤルンカン（8505m）の隊長候補になっていた。しかし運悪く登山交渉が難航して実現出来なかった。

私は先輩の書いた文章を多数読ませて貰ったことがある。その文には学習院山岳部の伝統を受け継いだ山登りがあった。深い思索と山岳部に対する熱い思いが語られていた。また叙情あふれる山旅の感想の文もあり、山の自然と人の姿が浮かび出たものであった。

私は、仲間と共に多くの山桜会員、現役部員に読んでもらいたい気持ちになり、先輩の本「山を想う」の出版を思い立った。先輩は出版に対してしばらくの間拒絶された。回を重ねての話合いで、多くの仲間の協力も得てようやく本が出来上がった。後日先輩から私に、自分の本「山を想う：学習院山岳部・三つの訓え」が出版されたことのお礼の言葉があった。

舟橋先輩は身体が強く、精神も強く、酒も強く、且つ光徳小屋を愛し、奥日光の山々を愛したことが思い出される。ご生前本当にお世話になったことに感謝し、ご冥福をお祈り申し上げる。

合掌

編集人注：

舟橋明賢氏は学習院高等科（旧制）ならびに京都大学法学部卒業

舟橋明賢『山を想う：学習院山岳部・三つの訓え』：1997 年 6 月、日生印刷株式会社

写真１　舟橋先輩

写真２　光徳小屋前にて
舟橋明賢、平井一正、
芳賀孝郎（左より）

第 54 回雲南懇話会（京都フォーラム）講演概要（その 2）

山岸久雄

2021 年 12 月 18 日（土）、京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホールで第 54 回雲南懇話会が開催されました。その講演概要（その 1）として前半の 3 講演を本ニュースレター第 101 号で紹介しましたが、今回は講演概要（その 2）として、後半のスライドショー講演 1 つを紹介

します。（なお、残る特別講演２つの概要については、次の103号で紹介する予定です。）

スライドショー　「西ネパールの辺境に魅せられて（河口慧海師の足跡、フムラ、ドルポ越冬）」

稲葉 香（ネパール探求家、美容師、2020年度植村直己冒険賞受賞者）

稲葉さんの講演は第45回、第52回雲南懇話会以来、3回目となる。前回は講演の後半にスライドショーが上映されたが、時間の制約があり慌ただしかった。もう一度ゆっくり観賞したいと思っていたが、今回それが叶い、美しい映像と音楽を堪能することができた。上映に先立ち、稲葉さんは、なぜ西ネパールに魅せられたのかという経緯を以下のように語った。

稲葉さんは2002年の頃、河口慧海師のチベット探検を知った。慧海師はリウマチという持病をかかえながら、ブッダ本来の教えを伝えるオリジナルに近い経典を求め、当時鎖国状態にあったチベットへ西ネパールから潜入した。稲葉さんも10代からリウマチに苦しんだという共通点があり、慧海師に親近感を覚え、師が西ネパールからチベットにしるした足跡を辿ってみたいと強く願った。この時以来、稲葉さんの人生は変わったという。

稲葉さんが実際に西ネパールへ足を踏み入れたのは2007年と2009年、故・大西保さんが隊長を務める大阪山の会「西北ネパール登山隊」への参加だった。この登山隊で稲葉さんは慧海師の足跡調査、未踏峰登頂などを体験し、秘境を歩く技術を学んだ。その後、稲葉さんは1958年に行われた川喜田二郎氏の西北ネパール探検隊の記録を調べ、当時の西北ネパールの様子や探検の考え方を学んだ。これら先人からの学びをベースに、稲葉さんは2012年より自ら西ネパールへの遠征を企画し、撮影を続けている。

今回、稲葉さんは3本のスライドショーを上映した。1本目は「河口慧海師の道」。稲葉さんは2016年、慧海師が西ネパールからチベットへと越境した足跡を辿りチベット国境まで歩き、その後ドルポ地方を横断し、ジョムソンへと至る500kmの道のりを58日間で踏破した。この旅の、チベット国境までの映像をまとめたものが、このスライドショーである（画像は雲南懇話会ホームページ https://www.yunnan-k.jp/yunnan-k/ の第54回、概要、稲葉香の項、プロジェクタ資料を参照）。BGMのバーンスリー（インドの民族楽器、竹製の横笛）の音色と男声の祈りの朗唱が、チベット高原の印象を引きたてる。

2本目は「フムラ・バラサーブレイクを探して」。これは2018年にネパールの最西部、フムラ地方の無人地帯を含む250kmの道のりを1ヶ月キャラバンした時に撮影されたものである。映像には少女のつぶやくような祈りと経文の朗唱が重なり、哀愁が漂う。この旅が立案された背景には、次のようなエピソードがあった。ある晩、稲葉さんの夢の中に大西さんが現れ、大西さんが作った西ネパール地図上の、とある湖を指差したという。それはインドやチベットとの国境に近い、フムラ地方の名もなき小さな湖であった。稲葉さんは、これを大西さんからの啓示と受け止め、この湖を探す旅を計画した。併せて、この地域から聖山カイラス（標高6656m）やナムナニ（7694m）、グナラ（6902m）などの山を展望すること、美しい木製の器プルを作っている村を訪ねることを目標にした。

この無人地帯の湖を見つけるには、ガイドに頼らず自分でルートを探す必要があり、稲葉さんには新たな挑戦であったが、無事発見することができた。稲葉さんはこの湖を、西北ネパール登山隊のバラサーブであった大西さんを偲び、バラサーブレイクと名付けた。当時、ドルポ地方での越冬を計画したものの、実行に踏み切れないでいた稲葉さんにとって、フムラの旅を自力で達成できたことは大きな自信となり、ドルポ越冬へ一歩踏み出す力となった。

最後のスライドショーは「ドルポ越冬」。高度約4000mの高原に広がり、どこから入るにも標高5000m以上の峠を越える必要があるドルポ地方（図1）。ここの景観と伝統的チベット文化に魅せられた稲葉さんは「ここの冬の暮らしはどんなだろう？自分で体感してみたい」と思うようになった。ドルポで出会った僧侶から「食糧と燃料を持ってきたら、冬ここに泊ってもいいよ」と言われ、ドルポ越冬へのあこがれは実現可能な夢に変わった。幸いクラウドファンディングでドルポ越冬の資金を確保することができ、あとは越冬用の食糧と燃料、合計200kgの物資を事前に現地へ運ぶことが課題であった。この輸送については紆余曲折があり苦

労したが、幸いにもドルポ地域へ遠征する知人が荷揚げを引き受けてくれ、課題は解決した。

越冬場所をサルダン村と決め、2019 年 11 月にドルポに入った（図 2）。稲葉さんは越冬中の活動として、(1) 慧海師が越えた可能性がある峠マゲン・ラをこの目で見る、(2) シェーゴンパを訪ねる、(3) ニサル村の冬の大祭を見る、(4) ロサル（正月行事）を体験する、(5) グレイトジャーニーで有名な関野吉晴さんが昔滞在した付近のテェーカン村を訪ねる、という 5 つの目標を立てたが、(2) を除き、すべて達成することができた。また、サルダン村での越冬中、稲葉さんが最も感銘を受けたのはプジャ（法要）であったという。これらの活動の映像が、朗唱とシンギングボウル（チベットの仏教法具）の響きを BGM として、上映された（図 3）。

ドルポからの復路は雪に埋もれた標高 5000m 以上の峠越えを含む 10 日間の行程になる。当初、3 月に帰る予定だったが、その時期は積雪が深く通行が難しいとの村人の指摘に従い、予定を 1 ヶ月早めて帰ることにした。ガイド兼ポーターの 3 人の僧侶を雇い、2020 年 2 月 15 日に出発。復路の途中、観天望気により、難所のチョイ・ラ峠越えで降雪が予想されたため、強行軍で峠を越えた。越えた翌日、大量の降雪があり、安堵の胸をなでおろしたそうだ。その先にも、渓谷沿いの切り立った岩壁を削った道が雪に埋もれ、緊張のトラバースを強いられる難所があったが、11 日目の 2 月 25 日、旅の出発点ドゥネイに無事帰還することができた。

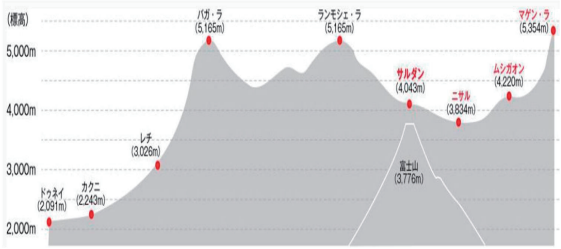

図 1　ドルポ地域の高度図

図 2　ドルポ越冬の行程図

図 3　冬のドルポ、サルダン村

第 55 回、第 56 回 雲南懇話会のお知らせ

第 55 回雲南懇話会を以下のとおり開催いたします。

1. 日時：2022 年 11 月 27 日（日）13 時 00 分～ 17 時 30 分。
2. 場所：国際協力機構（JICA）研究所、国際会議場（東京市ヶ谷）
   https://www.jica.go.jp/jica-ri/ja/about/access.html
3. 講演内容：

①「北の大地、単独縦断 670km、2022 年 2 月～4 月の記録　ー宗谷岬から襟裳岬へー」
山岳ガイド、北海道大学ワンダーフォーゲル部 OB、北大えるむ賞[註1]受賞　野村良太

②「中国南西部に花を追う　ー四川省・雲南省での青いケシ探索ー」
日本山岳会アルパインフォトクラブ、青いケシ研究会、横断山脈研究会　松永秀和

③「雲海の村と棚田　ー中国雲南省紅河州金平県者米谷の生活世界ー」
国立歴史民俗博物館名誉教授、滋賀県立琵琶湖博物館名誉館長　篠原徹

④トピック「『2050 年 CN』[註2]に向けた再生可能エネルギー利用　ー風力発電随想～日本の洋上風力発電の見通しー」
（一社）ディレクトフォース（環境部会）、石油開発企業 OB　中西聡

註1：毎年度末に行われる北海道大学総長表彰のこと
註2：CNはカーボンニュートラルの略。温室効果ガスの排出量と吸収量を均衡させること。
日本政府は2050年までにカーボンニュートラルを目指すことを2020年10月に宣言した。

第56回雲南懇話会を以下のとおり開催いたします。

1. 日時：2022年12月25日（日）13時00分～17時30分。
2. 場所：国際協力機構（JICA）研究所、国際会議場（東京市ヶ谷）
3. 講演内容：

①「梅里雪山からチベットの聖地巡礼へ」
写真家、カワカブ会代表、AACK特任理事　小林尚礼

②「生きて還って、また登る　－奇跡の生還からの40年－」
市川山岳会（当時）、日本山岳会理事・千葉支部長　松田宏也

③「チベットの医学と祈り」
チベット医・アムチ、薬剤師、森のくすり塾主宰　小川康

④「地球はどこでも研究室　－氷河から熱帯雨林、ヒマラヤから海中まで－」
京大野生動物研究センター名誉教授、AACK会長　幸島司郎

会員動向

訃報

高木洋祐　2019年11月25日逝去
安藤元雄　2022年7月5日逝去

会員異動

木村泰久　自宅住所変更
谷　泰　　自宅住所変更

事務局だより

5月28日（土）、2022年度総会が、対面とウェブ配信のハイブリッドにて、会員の過半数の出席を得て開催され、予定の議案の承認を持って無事終了しました。

あわせて、AACK設立90周年記念行事の一環として、上尾会員、西山会員、松林会員、幸島会員による「カンペンチン峰初登頂と学術研究の発展」にフォーカスした講演会が開催され、改めて、登山、学術両面のパイオニアスピリットを堪能することができました。

5月は運良く新型コロナ感染がおさまっており、ハイブリッドではありましたが、3年ぶりの対面開催を実現でき、皆様との再会を楽しむことができました。

来年度の総会は2023年5月27日土曜日を予定しています。皆様、奮って是非ご参加ください。

編集後記

初登頂から40年、カンペンチン周辺はいまどうなっているのでしょうか。芳賀孝郎さんには無理をお願いして舟橋明賢さんの追悼文をいただきました。ありがとうございました。このあとの雲南懇話会、無事開催を願っています。

横山宏太郎

次号原稿締め切り　2022年10月16日
原稿送り先：横山宏太郎

発行日　2022年9月25日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　幸島司郎
発行所　〒606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究２号館４階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町1-8
㈱土倉事務所